

「被災児童の課外活動支援—南相馬市の子どもたちを対象に」報告書

代表 藤森立男(横浜国立大学教授)

1. 目的

東日本太平洋沖で起こった巨大地震(2011年3月11日)は、その後、大規模な津波を広範囲に発生させ、一瞬にして人々の平穏な暮らしを葬り去った。さらに、その津波は福島県沿岸にも断続的に押し寄せ、福島第一原子力発電所を襲い、放射性物質漏洩事故を連鎖的に引き起こした。

この大震災による死者・行方不明者は1万9千人余りとなっており、戦後最大級の惨事をもたらしている。このように、今回の東日本大震災は地震による被害だけでなく、その後の津波の襲来、さらには原子力発電所の放射性物質漏洩という複合災害を引き起こしており、被災者に次々に降り積もるトラウマをもたらしている。

今回の東日本大震災に対して、藤森立男ら(2011)は北海道南西沖地震(1993)時に作成した冊子をベースにさらにバージョンアップし、甚大な被害のあった福島県・宮城県・岩手県などの教育庁や教育委員会へ各1000部を寄贈している。これは学校の教職員を対象に執筆されており、(1)災害が心と身体に及ぼす影響、(2)トラウマ・急性ストレス反応・PTSD、(3)子どもたちへの対処法、(4)保護者へのアドバイス、(5)子どもや家族が無くなった後の学校での対応、(6)親を亡くした子どもたちへの対応などから構成されている。B5版のサイズで、24頁からなっている。今回の大震災後の特徴としてインターネット上に心のケアに関するさまざまな冊子がPDFの形で紹介されるようになっており、各種の取り組みの案内が掲載されている。藤森らが制作した「災害を体験した子どもたちの心のケア」についても宮城県教育庁や国立教育政策研究所のウェブサイトへの掲載依頼があり、各機関のウェブサイトホームページに掲載され、広く活用されている。

これに加えて、藤森らは被災した子どもたちの心のケアについて支援活動を行うことが重要と考えた。具体的には、福島県南相馬市から栃木県に避難していた子どもたちを対象にし、課外活動を通じた心理的な支援活動であった。南相馬市は今回の原発事故によって警戒区域、計画的避難区域、緊急時避難準備区域、それ以外の一般区域の4区域に分断されていた。なかでも、原発から20キロ以内に含まれる警戒区域、20キロから30キロに含まれる緊急時避難準備区域、放射性物質の汚染度が高い計画的避難区域に自宅のある被災者たちは福島県南相馬市から栃木県に避難していた。栃木県では二次避難所として日光市鬼怒川温泉にあるホテルを指定し、そのホテルに南相馬市からの被災者と子どもたちが集団避難していた。こうした被災地の小学生の様子を観察したところ、独り遊びや個別に同じ遊びをする平行遊びが目につき、相互に連携する連合遊びや協同遊びが少なかったことから、子どもたちの課外活動の支援が必要であると考えた。トラウマを受けた子どもたちは自分の殻に閉じこもりやすく、孤立感をいだきやすい。このような悪影響を断ち切るためには、他の子どもたちや周囲の大人たちと協同の活動を通して温かい人間関係を築く必要があり、自分が受け入れられ、配慮され、大切にされているという感覚を味わうことが重要である。

以上のことから、小学生の課外活動を通じて子どもたちと周囲の大人たちが触れ合うことにより、被災した子どもたちの心理的な支援活動を実施することを目的とした。このことにより、ささやかではあるが、被災した子どもたちの未来を支えることが可能になると考えたのである。

2. 計画

課外活動の内容としては、陶芸体験、お菓子作り、絵本作りなどを取りあげた。これらの課外活動(遊び)は楽しいことが原則であり、子どもたちの心のケアにつながることをSchaefer(2011)は指摘している。この楽しい活動を通じて、トラウマを克服し、コミュニケーション能力や社会性などを養い、ひいては生きることに對するエンパワーメント(empowerment)を育てることが可能であると考えている。なお、この課外活動への参加は子ども自らが望んでいることが重要な前

提である。

(1) ボランティア・メンバー

本ボランティア活動に参加したスタッフは下記の通りであった。

| 氏名 | 所属 |
|-------------|--|
| 藤森 立男（代表者） | 横浜国立大学大学院国際社会科学研究科・教授 |
| 大森 哲至（事務局長） | 横浜国立大学大学院国際社会科学研究科・研究生 |
| 村橋 和嘉子 | フランス菓子教室主宰・パティシエ |
| 渡辺 有理子 | 東京学芸大学附属国際中等教育学校・司書 |
| 江竜 珠緒 | 明治大学付属明治中高等学校・司書教諭 |
| 伊東 功太郎 | 宇都宮陶芸倶楽部主宰・陶芸家 |
| 島田 昌紀 | 栃木県立小山城南高等学校PTA・副会長 |
| 岩井 美路子 | いわい産商有限会社・会社員 |
| 藤吉 信子 | 横浜市立脳血管医療センター・看護主任 |
| 中山 雅之 | 国土館大学 21 世紀アジア学部・准教授 |
| 村橋 卓也 | パーソナル・ディビジョンズ・インターナショナル・ジャパン株式会社・コンサルタント |
| 高井 秀明 | 日本体育大学体育学部・助教 |

(2) 支援のプログラム

実施の日程は6月11日から7月23日までの期間である。各実施日の活動内容は、下記の通りである。

表1. 支援プログラム

| | 日時 | 内容 | 場所 |
|-----|--|---------------------------------|---------------------|
| 1回目 | 6月11日（土） 13時30分から16時 | お菓子作り 鬼怒川小学校の児童 担当：村橋先生 | 藤原総合文化会館 2階・調理室 |
| 2回目 | 6月18日（土） 14時から16時 | 絵本作り 鬼怒川小学校の児童 担当：渡辺・江竜先生 | 鬼怒川パークホテル 1階・鶴の間 |
| 3回目 | 6月26日（日） 14時から16時 | 絵本作り 鬼怒川小学校の児童 担当：渡辺・江竜先生 | 鬼怒川パークホテル 1階・研修室 |
| 4回目 | 7月3日（日） 10時に集合し、宇都宮へ バスで移動、11時から14 時30分 | 陶芸体験 鬼怒川小学校の児童 担当：伊東先生 | 宇都宮陶芸倶楽部 アトリエ |
| 5回目 | 7月23日（土） 11時から12時 | 陶芸作品の発表会 鬼怒川小学校の児童 担当：藤森 | 鬼怒川パークホテル 1階・研修室 |

(3) 実施内容

福島県南相馬市からの被災者は、栃木県日光市に位置する2つのホテルに集団避難しており、約170名が滞在していた。この避難者のなかには児童が含まれており、日光市立鬼怒川小学校へ通学していた。私たちは鬼怒川小学校の校長先生を訪ね、課外活動のボランティアの可能性について説明したところ、避難している保護者代表者に面会することができた。そして、保護者代表者に上記ボランティアの趣旨や内容を説明した結果、ボランティア活動の受け入れが可能であるとの返答を得ることができた。そこで、各保護者にお菓子作りや陶芸体験などの案内用紙を配布し、各回の参加者の募集を実施した。鬼怒川小学校へ通学している被災児童は18名であった。

①お菓子作り

第1回目は、6月11日(土)13時30分から16時までお菓子作りを実施した。指導したのは、お菓子教室を主宰するパティシエの村橋和嘉子先生であった。場所は日光市にある藤原総合文化会館2階の調理室であった。この調理室には料理用オーブンが3台用意されており、調理台は5台備えてあった。参加した児童は5名、保護者が4名の計9名であった。テーマは3つから構成されており、(1)スノーボール作り、(2)クッキー作り、(3)ショートケーキ作りであった。

指導のポイントは次の通りである。スノーボールの場合は手早く丸めないと、バターが溶けだしてべたつくので、あまり触りすぎずに丸める必要がある。クッキーに関する指導のポイントは、均等に麺棒で伸ばして、型を押して、丁寧に型からはずし、鉄板に乗せる。その後、表面に型を押して模様をつける。焼きあがったら、アイシングで丁寧に模様を書いていくことであった。また、ショートケーキに関する指導のポイントは、スポンジ生地にシロップをハケで均等に塗り、生クリームをパレットナイフで塗り広げたものの上に、フルーツをきれいに並べることであった。きれいに並べると、カットした断面が美しくなる。華やかなデコレーションケーキを自分達で協力しながら作ることは、すばらしい経験になると考えた。

活動の様子:スノーボールを丸めると、クッキーの型を抜くのは、児童たちは思ったよりも早く、上手にできていた。また、焼きあがったクッキーに、アイシングで仕上げをするのも、それぞれ自由に、好きなように作って楽しんでいた様子であった。男子児童はお菓子作りに躊躇するのではないかと危惧していたが、杞憂であり、男女ともに熱心に取り組んでいた(写真1)。また、最初のうちは児童だけの取り組みであったが、途中から保護者も自発的にお菓子作りに参加するようになり、子どもたちと一緒にお菓子作りの喜びを体験することができた。終了後には、複数の保護者からお菓子作りをするためのレシピを指導の先生に尋ねており、子どもたち以上に保護者の方がお菓子作りに興味を抱いていたことが印象的であった。

②絵本作り I

第2回目は6月18日(土)であり、14時から16時まで絵本作りを実施した。指導したのは東京学芸大学附属国際中等教育学校司書の渡辺有理子先生と明治大学付属明治中高等学校司書教諭の江竜珠緒先生であった。場所は日光市にある鬼怒川パークホテル1階の鶴の間であった。参加した児童は10名、保護者は5名の計15名であった。絵本作りIは3部から構成されており、(1)導入:手遊びと布絵本の読み聞かせ、(2)広告や雑誌を用いた絵本作り、(3)ミニ絵本作りであった。

以下では、絵本作りIの指導の概要を説明する。(1)導入:手遊びと布絵本の読み聞かせでは、児童たちと初対面のため、導入として低学年でもできる手遊びを行った。続いて児童参加型の布の絵本「あれあれ?」を実演した。児童に問いかけ、答えてもらう形式を通じ、絵本作りをはじめ前の相互交流を図った。(2)広告や雑誌を用いた絵本作りでは、低学年でも絵本作りに興味関心を持ち、「これなら自分でも作れそうだな」と思ってもらえる簡易な絵本作りを取りあげた。また、広告を切って色紙に貼り付けるだけでなく、各頁のお店の商品の中に、1点無関係の商品(例えば、洋服屋の衣類の中に海苔巻)を貼るようにし、子どもたち同士が相互に完成した絵本を見せ合い、楽しみを共有できる作品となるように指導した。(3)ミニ絵本作りでは、広告絵本作りだ

けでは物足りないと感じる高学年児童の参加を想定して材料を持参したものである。絵本作りの途中で、6年生の女兒（5名）が参加してきたので、内容を紹介すると興味を示したため実施した。事前に材料を切って用意しておいたため、児童はのり付け作業だけで1冊の本を完成することができた。また表紙の和紙が好みで選べることも児童の制作意欲を促進し、一人平均4冊を作成していた。

活動の様子：児童には名前のシールをつけてもらったので、早めに名前を覚えることができ、初回にしては児童がうちとけて参加してくれ、指導しやすかった。絵本作りの会場には、絵本や布絵本を展示しておいたので、子どもたちが絵本作りをする際の絵のヒントにもなっていたようである。また、それらの展示物を通じて保護者ともボランティアが交流でき、集中力の途切れた児童の時間しのぎにもなっていた。広告や雑誌を用いた絵本作り（風変わりなお店）は、完成した後の「間違い探し」も楽しい絵本なので、子どもたちがお互い同士で工夫を凝らしあったり、誰かのすごいアイデアを褒めあったりする場面などもあり、微笑ましくもなっていた。また、誰かが探している写真を見かけた児童がどこにあるかを教えてあげるなど、個人作成の絵本ではあったが、協力し合う場面なども観察された。また、作り方を覚えた高学年児童が、後から参加した児童に作り方を教えていた。第1回目は低学年の児童には傍らに保護者、または指導者が付き添って作業を行ったこともあり、児童は相談しながら作業をすることができた。会場には児童だけではなく保護者が同席していたことで、児童は不安を抱くことなく絵本作りに専念することができたようである（写真2）。

③絵本作りⅡ

第3回目は6月26日（日）であり、14時から16時まで絵本作りを実施した。指導したのは前回と同様で、東京学芸大学附属国際中等教育学校司書の渡辺有理子先生と明治大学付属明治中高等学校司書教諭の江竜珠緒先生であった。場所は日光市にある鬼怒川パークホテル1階の研修室であった。参加した児童は6名、保護者は6名の計12名であった。絵本作りⅡは2部から構成されており、(1)ストーリーのある絵本を作ろうと(2)プルタブでのフェルトへび作りであった。

(1)ストーリーのある絵本を作ろうでは、最初に子どもたちに「いつ・どこで・だれが・なにをした」の札を1枚ずつ引いてもらい、それに沿った絵本作りをするという説明をし、例を見せた。なお、「描けない」ものに関しては、好きな札と交換できるようにした。イメージを絵に表現することの難しさに戸惑う低学年もいたので、表現のためのヒントを与えた。(2)プルタブでのフェルトへび作りでは、缶飲料についているプルタブを用いてフェルトのへびを作るというものである。プルタブでのへび作りは、まずプルタブが缶飲料の蓋部分についていることを児童に紹介してからはじめた。プルタブは取り外した断面部分をフェルトで包むながら取り付けるため、完成物で子どもが指を切るといった事故がおこらないよう配慮されている。このため、最初に断面部分を左側に持ちながら作成することを指導した。

活動の様子：低学年から高学年までの児童が混じっている場合、ストーリー性のある絵本作りはやや指導が難しいものがあった。特に同じテーマを課すと、作成や絵の表現にとまどう低学年児童に講師がつききりとなり、全体を見るのが困難であった。このことを考慮すると、低学年の児童には、もう少しやさしい絵本作りを組み合わせさせておこなわせても良かったと思う。しかし、子どもたちが楽しそうに色をぬっている姿が印象的であった。また、絵を描いている途中で、講師や他の大人たちに見せに來たり、お互い同士で見せ合ったり声をかけてもらったり、いろいろアドバイスをもらったりすることを楽しんでいる子どももいた。

絵本作りでは各回とも、作品の発表会を行った。しかし、児童は自分の作品が「完成していない」と感じている場合には人前で発表しなかった。しかし、各回とも全員が自分の作った作品を発表した様子を見ると、ある程度は自分の作品に満足していたことが窺えた。また、第2回目の発表会時に、第1回目の作品を發展させたものとして自発的に新たな作品を完成させ、創作絵本を見せてくれる児童もおり、子どもの自発的な創作意欲に驚かされた。

④陶芸体験

第4回目は7月3日(日)であり、児童と保護者たちが集団避難している日光市のホテルに中型バスをチャーターし、迎えに行った。午前10時に集合地点に集まり、宇都宮陶芸倶楽部のアトリエに移動した。アトリエでは11時から活動を開始し、昼食をはさみ、14時30分まで実施した。指導したのは陶芸家の伊東功太郎先生であった。参加した児童は15名、保護者は10名の計25名であった。陶芸は2部から構成されており、(1)手びねりと(2)絵付けであった。

(1)手びねりでは、今回は初心者が対象のため、比較的作り易い「玉づくり」による成型を指導した。「玉づくり」とは、丸めた土をロクロに乗せ、指先で少しずつ伸ばして形を作る技法である。小学生でも茶碗サイズまでなら無理なく作れる(写真3)。お皿は「タタラ作り」による成型を指導した。土を叩いて伸ばし、縁を立ち上げるという技法である。粘土の板をタタラという。初心者でも形にし易い方法を用いて指導した。(2)絵付けでは、本来乾燥または素焼した器に絵付けをすることで濃淡の表現や正確な線を書くことができる。しかし、時間の都合上、水分を含んだ素地に描くように指導した。少々ラフな絵付けになってしまうが、自分で作った器に絵付けをすることで個人的な表現が広がると考えたからである。

活動の様子：初めて陶芸を体験する子どもたちがほとんどだったので、少々心配していた。しかし、子どもたちは大変真面目に取り組んでいた。作りたい物がはっきりしていたし、何よりも作りたくてしょうがないという思いが伝わってきた。なかには、昼食の時間もおしんで、アトリエで自発的に新しい器を作っている子どもも見かけた。

⑤陶芸発表会

子どもたちが制作した陶芸作品を7月23日午前11時に日光市のホテルへ持参した。研修室のテーブルに完成した陶芸作品を並べ、子どもたちによる作品の発表が行われた。予想していた以上の作品の出来栄えとなっており、出来上がった作品は「小学生としては随分レベルの高いものになった」との陶芸の先生からの評価が伝えられた。結果として非常に良い作品に仕上がっており、個人差はあるものの、今回の陶芸教室での子どもたちの様子を見る限り、十分に自己主張することができていたと感じた。

3. 総評

今回の東日本大震災は、子どもたちに住居の移動、学校の転校、友人との別れ、家族との別離など、著しい環境変化をもたらした。また、原発事故はいつ終息するのか、放射性物質の汚染除去はいつ完了するのか、いつ故郷に帰れるのかなどに関する迅速で正確な情報提供がなく、子どもたちは今後の生活について見通しが持てない状態になっていた(写真4)。人生を主体的に生きることができず、他者に運命を握られ、翻弄されることは無力感やむなしさを募らせ、心の安定を喪失させる。このようなトラウマを受けた子どもたちは自分の殻に閉じこもりやすく、睡眠障害や孤立感をいだきやすい。しかし、傷ついた子どもたちの心の回復にはカウンセリングやセラピーだけが有効とは限らないように思われる。また、被災地の子どもたちが信頼のおけるカウンセラーと出会い、長期にわたって安心のできる親密な関係を継続することはほとんど困難である。被災地には子どもたちにとって信頼がおける、安心のできるカウンセラーの数が足りないからである。さらに、子どもたちが眠れないということだけで、カウンセラーのところへ相談に連れて行くことに抵抗を感じる保護者が多いようである。

こうしたことから、福島第一原子力発電所事故の放射性物質漏洩から逃れ、栃木県日光市の鬼怒川温泉にあるホテルに二次避難していた南相馬市の子どもたちを対象に課外活動の支援を実施した。時間をかけて丁寧に子どもたちと接することも手助けとなることがあると考えたからである。なお、この活動には保護者も参加した。家族が一緒になって肯定的な感情体験を共有することは今後の子どもたちの成長に役立つと考えた。本活動に参加した子どもたちは延べ36名(保護者は延べ25名)であり、各活動の最後に子どもたちに対してアンケート調査を実施している。

このアンケート調査には 28 名が回答しており、各質問項目に対する回答は 3 件法（「はい」「いいえ」「どちらともいえない」）であった。その回答結果を見ると、今回の課外活動を「楽しめた(92.9%)」「興味を持った(78.5%)」「満足した(89.3%)」「今後も参加したい(96.4%)」と多くの子どもたちが回答（「はい」）しており、今回の課外活動を総じて肯定的に受けとめている様子が明らかとなっている。

こうした肯定的評価の基礎となっているのは、指導にあたった先生やボランティアたちなどの接し方であると考えている。今回、子どもたちが体験した陶芸・絵本・お菓子作りなどの活動はほとんどの子どもたちにとって初めての体験であった。このため、最初の段階では子どもたちには「できない、どうしよう」という躊躇の反応が見られた。しかし、先生やボランティアたちの丁寧で親身な指導と励ましなどによって「次第にできるようになっていく」プロセスを観察することができた。このようにして子どもたちは「やればできる」という自信と周囲の大人たちから受け入れられ、配慮されているという安心感や信頼感を持つことができたと考えている。また、子どもたちのコミュニケーション能力や協調性・社会性などを育む機会を提供できたように思われる。

その他、本活動においては宇都宮大学のボランティアグループとも連携することができた。宇都宮大学のボランティアグループは被災した子どもたちの勉強を支援することを目的としており、週末に子どもたちに勉強を教える活動を企画していた。このため、子どもたちや保護者への自己紹介、雰囲気をつかむために、第 3 回目の絵本作りⅡの活動に合同参加している。彼女たちの活動は私たちの活動が終了した 7 月 23 日以降も続けられており、栃木県の地元のボランティア団体とも協働するかたちでボランティア活動を展開することができた。今回の活動が被災した子どもたちの心の癒しとなり、子どもたちの生きる力の一助になることを祈っている。

最後に、本活動の実施にあたっては多くの方々から支援を受けている。特に、日光市教育委員会と鬼怒川小学校には大変お世話になっている。なかでも、鬼怒川小学校の加藤道弘校長先生には本ボランティア活動を理解していただき、集団避難する保護者代表者をご紹介していただいた。また、ボランティア活動の施設として日光市立藤原総合文化会館と鬼怒川パークホテルを使用させていただいた。急なお願いにもかかわらず、両施設には格別の便宜を図っていただいた。ここに記して感謝申し上げあげたい。



写真1. お菓子作りの様子



写真2. 絵本作りの様子



写真3. 陶芸作りの様子

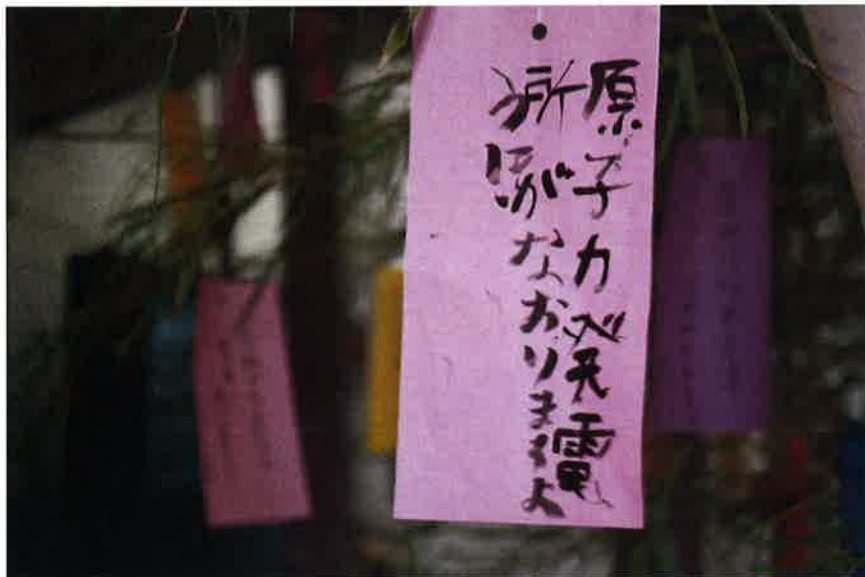


写真4. 七夕祭りでの子どもたちの願い

宇都宮

陶芸に真剣表情 避難児童ら体験

支援グループが心のケア

【宇都宮】福島第1支援隊が主催した。原発事故を受けて福島県から日光市に避難している同市鬼怒川小の児童や家族ら約25人が6日、下田原の陶芸教室「宇都宮陶芸倶楽部」で陶芸を楽しんだ。

遊びを通して避難児童の心のケアをしようと活動している支援グループ「下野課外活動

みなを制作。支援隊発起人の横浜国立大学院藤森立男教授(56)「災害心理学」は「子どもたちは毎回楽しんでいる。当初の目標は達成できたと思う」と目を細めた。

*鬼怒川小2年佐藤拓麻君(7)は「毎回参加して、友達できた。茶わんが焼き上がるのが楽しみ」と笑顔で話していた。



陶芸を楽しむ福島県からの避難児童たち

下野新聞(2011年7月4日)

新聞記事：地元紙に取りあげられた活動風景

支出報告書

| | |
|-----------------------|----------|
| 消耗品 | |
| 1. 材料費 | |
| お菓子づくり | 25,000円 |
| 絵本づくり | 67,410円 |
| 陶芸づくり(粘土代、焼成代、絵つけ代含む) | 75,000円 |
| 2. 事務用品、文房具費 | 69,464円 |
| 3. 飲み物、お菓子費 | 42,753円 |
| 4. 薬品費 | 7,806円 |
| 小計 | 287,433円 |
| 旅費・交通費 | |
| 1. 日光-横浜-東京 | |
| A氏 | 60,460円 |
| B氏 | 112,970円 |
| C氏 | 13,480円 |
| D氏 | 22,800円 |
| E氏 | 22,110円 |
| F氏 | 18,960円 |
| 日光-宇都宮-栃木 | |
| G氏 | 49,040円 |
| H氏 | 26,640円 |
| 2. 宿泊費 | 108,085円 |
| 3. 送迎バス費 | 35,900円 |
| 小計 | 470,445円 |
| その他 | |
| 1. 会議費 | 51,230円 |
| 2. 通信費 | 11,210円 |
| 3. 写真費 | 22,670円 |
| 4. 新聞費 | 1,400円 |
| 小計 | 86,510円 |
| 合計 | 844,388円 |

平成24年2月12日

以上の通り、間違いありません。

藤森立男

